

村上哲見 「宋詞研究」 (唐五代北宋篇)

東京 創文社 東洋學叢書 一九七六年三月 本文
四九七頁

本書は著者村上氏の永年にわたる研究の成果である。

「詞」は、從來我國においては研究されることの少なかった分野である。これまでに中田勇次郎氏などに「詞」についての著作があり、現に幾つかの注解の書も公けにされてはいるが、このたび、まとまった研究書として本書の刊行されたことは甚だ大きな意義をもつものであり、今後、「詞」の研究を志す者にとって有益な指針となると言えよう。

さて、本書は氏の學位論文を主として構成されており、篇目は次のようになっている。

序説

第一章 「詞」の語義と韻文様式としての「詞」

第二章 詩と詞

上篇 唐五代詞論

第一章 詞源流考

第二章 溫飛卿詞論

第三章 五代詞論

下篇 北宋詞論

書評

第一章 綜論

第二章 張子野詞論

第三章 柳耆卿詞論

第四章 蘇東坡詞論

第五章 周美成詞論

（なお、これら各論稿の間に數篇の附考及び附論が挿入されている。ほとんどが考證を主とするものであるが、その搜檢の幅廣さと着眼の鋭さには敬服させられるものがある。）

篇目を見てもわかるように、「詞」の語義から説きおこし、「詩」と「詞」の關連、唐五代詞、北宋詞と論を進め、北宋までの「詞」をほぼ餘すところなく説いており、初學者の者でも、從來あまり知られていない「詞」についての認識を充分持ち得ると言える。全體を通じて堅實でかっちりまとまっており、並々ならぬ勞作である。特に、北宋における「詞」の展開を観る中で張先（子野）の存在に注目され、張先と蘇東坡との關連を指摘されている點などは氏

の卓見である。しかし、こうした勞作であり、前述のような卓見を數多く含みながらも、評者の讀後感は何か釋然としないのである。以下、こうした釋然としないものを疑問の形で幾つか提出してみたいと思う。

まず、第一に、氏はその周美成詞論の冒頭で、「舊來の論者たちは、中國における傳統的な文學批評の常道として、概ね結論的な短辭を點綴するのみである」と指摘されているが、まさにそれが氏自身にあてはまるのではないか。その最も顯著なのは蘇東坡詞論においてである。第三節「東坡詞の特色」において、氏は「日常の見聞の點描に絶妙の筆致を示す」例として「浣溪沙」をあげ、それに續けて次のように言われる。

「そしてやがては輕妙にして克明な描寫に加え、その中に人生のすがたを平靜に觀照し、深い感慨をさりげなく寓するようになる。従つてそれらは、日常生活のひとつこまを描きながらも、單なる寫實をこえて、ひろい象徴性を備えているように感じられる」（三二七頁）

この後に「定風波」と「臨江仙」をその例としてあげて

あるのだが、それは原文と書き下しのみで、一體どういふ點が「ひろい象徴性」を備えているのか全く論述がないのである。引用した作品について、氏自身のアプローチによつて作品と對峙する姿勢を示して論述してもらわなくては、讀者は氏の意見をまさしく拜聴するしかないのである。また、その次には「鷓鴣天」をとりあげ、これもまた原文と書き下しだけで「達人の境地」などと抽象的に言われても、その作品のいかなる點が「達人の境地」を開示しているのかの吟味がなくては、讀者は取りつくしもない。これでは東坡詞概説である。こうした論證不足は張子野詞論の中にも見られる。張子野詞の特色 その三（警句）において、氏は次のように言われる。

「そして警句を重んずるというのは、創作する側からいえば、一字一句の表現に工夫を凝らすということになろうが、それはやはりこうした平靜な日常的な感情の表出ということと深いつながりをもつと思う。少なくともそれは激情の表現とは結びつき難いものであろう」（二二〇頁）

警句を重んずることが一字一句の表現に工夫を凝らすこ

とになるというのも疑問のあるところではあるが、それが何故平靜な日常的感情の表現につながり、少なくとも激情の表現には結びつき難いと言ひ得るのか、全く理解に苦しむ。このことは創作という營爲の本質にかかわる問題であり、充分に掘り下げた論證が是非とも必要なはずである。そもそも、この警句を張子野詞の特色とするという立論自體が論證不足なのである。氏があげられた「張三影」についての宋人の記事は、張子野の作品を受け取る側からの評語であり、その記事に、「此れ余が生平意を得たる所なり」という張子野の「張三影」に關する言葉が載せられてはいても、それが即ち張子野自身が常に警句を作ること意を注いでいたという確證にはなり得ないのである。それを、この記事をもとにして、「仁宗朝における詞風の轉變を見出し得る」と論斷するのは非常に危険である。もっと具體的に張子野の作品に即して論證してゆくべきではなかったか。外的證據をあげるだけで、作品自體の分析による内的證據を明示しなくては論として不十分ではなからうか。この後に先に引用した部分が續くのであるが、そうなる、

この一節自體が非常に納得のいかないものとなってくるのである。

第二點としては、周美成詞論において、氏は中國における從來の評を幾つかあげながら周美成詞の特色を論じられているが、結局は周美成を宋詞の第一人者、集大成者とするそれらの評の再確認に終ってしまったという感じは否めなく、なんら新鮮さの感じられぬ議論になってしまっている。これには評者は不滿を禁じ得ない。中國傳統の評價というものは、氏のいわゆる「雅俗の見」に左右される程度が大きいのであって、周美成を宋詞の集大成者とする評價に關しても、宋詞全體を見渡した上での、現在「詞」に取り組んでいられる氏獨自の肉聲の見解をお聞きしたかった、というののはははずれであらうか。たとえば、「詞」の發生當初からの大きなテーマである閨怨などのいわゆる艷詞に關しては、周美成は柳永の到達した境地を一步も出ておらず、むしろ「花間集」の世界へ逆戻りしているように評者には思われるのであるが、氏はそうしたものに全く言及されていない。また、引用される作品も、「瑞龍吟」や「蘭

陵王」などの、從來引き合いに出されるものが殆んどである。要するに、宋詞の集大成者だとされる周美成だからこそ、從來引用される作品ばかりを引用されるのではなく、もっと幅廣い、多角的な面からとらえた周美成論を展開されるべきではなかっただろうか、と評者は考えるのである。次に、「雲謠集」をはじめとする敦煌の曲子詞について氏の取り扱いにも非常な不満を禁じ得ない。氏も本書の中で「雲謠集」について何度か觸れられているが、附考とされた「雲謠集小考」は考證に關する論考でしかなく、「雲謠集」の作品そのものに關する研究がなされていないのは片手落ちではないか。「雲謠集」については王重民氏らに校訂の書があり、中でも任二北氏の「敦煌曲校録」が著名である。しかし、任氏の書は非常に獨斷的な校訂が目につき、また誤りも多く、その權威はいまだ確立されていないと言ってよいのである。また、氏も本書の中で指摘されているが、柳永の慢詞の技法と民間の作品との關連を追求することは非常に重要なことではないか。そして、その一つの手掛りを與えてくれるのが「雲謠集」をはじめ

とする敦煌の曲子詞なのであるから、これについて考證のみではなく、專論を設けるべきではなかったろうか。近年の「詞」研究の先陣を切っていられる氏の著書の中に、「雲謠集」に關する專論を見出し得ないことは非常に残念なことである。「雲謠集」の中にも、氏が柳永の句法の特徴の一つとされた、上三下四となる七言句が見られるのであつて、例をあげれば次のようになる。

堪娉與公子王孫 (傾盃樂)

渾身掛綺羅裝束 (同前)

渾身掛異種羅裳 (內家嬌)

こうした例と柳永との關連はいかなるものであるか、あるいは「雲謠集」に收められている作品の作風との關連はどうなのか、といった問題について、氏の論述を要求するのは見當違いなことであろうか。また、柳永によって端緒を切られたとされる慢詞の研究のためばかりではなく、それ自體の詞史における位置付けのためにも「雲謠集」についてもっと論及されるべきではなかっただろうか。

第四點は、本書を讀んで、「詞」における漢文書き下し

の方式に對する疑問があらためて感じられたことである。

「詩」においては、書き下し方式はすでに定着した感があるのではあるが、「詞」に關しては評者はいまだにその是非がはっきりしないのである。この疑問は本書によつても全く解決されなかった。本書は作品を引用する場合、一樣に原文と書き下し文のみであるが、果してそれでよいのであろうか。疑問を禁じ得ない。「詩」と同様の句法の場合、はそうでもないのであるが、慢詞などの「詞」特有の句法をもつ作品の場合には、何か違和感が感じられるのである。このような場合、本書においても氏は大分苦心して書き下しをされているようだが、次にあげるような例を見ると、果してこの書き下しで原文の意をほぼ的確に反映し得ているのだろうかと考えざるを得ないのである。たとえば、二五二頁、柳永の「晝夜樂」における次の部分である。

一日不思量 一日 思量せざるも

也攢眉千度 也た眉を攢むること千度なり

氏は右のように書き下していられるが、「一日不思量」

書 評

という句の意をこの書き下しで充分に表出しているかという、疑問なのである。この書き下しを素直に現代語に置き換えれば、「一日思わなくても」となると思うが、これでは原文の微妙なニュアンスは傳わらない。原文にそつて譯せば、「一日だけ思わないようにしても」とすべきであろう。また、同じ柳永の「征部樂」の中の一節（二六〇頁）も氏は次のように書き下していられる。

待這回

這の回を待ち

好好憐伊

好好く伊を憐しみ

更不輕離拆

更に輕ろしく離拆せざらん

右の「待這回」の「待」は、張相「詩詞曲語辭匯釋」に言うところの「猶將也、打算也」の意であつて、三句目の「更不輕離拆」まで掛かる。氏も御承知ではあつたと思うが、この書き下しでは「待」は「這回」までしか掛からず、原文の意的確に傳えているとは言い難いのである。ただ原文の書き下しのみでは、氏が作品をどのように理解されているのか全く判然としないのである。こうした例を見る

と、「詞」において書き下しのみに頼ることの難しさと危険性を痛感するのであるが、氏のお考えはいかがなものであらうか。

最後に、「詞」を研究するという点について、本書を讀んでの感想を述べてみたい。

いったい、歌辭文藝は歌辭とメロディーが一つとなつてその本質を全うできるものである。本書の取り扱う「詞」という文學様式は、現在ではメロディーが失われ、いわば片肺飛行の状態である。メロディーが再現できない以上、「詞」という歌辭の部分だけに對して研究を進める以外にはどうしようもないわけである。しかし、その本來の歌辭としての性格を考えると、「詞」の研究に際しては、常にメロディーの存在したことを念頭に入れながら考察を進めなければならぬのではないだろうか。つまり、歌辭文藝の歌辭とメロディーとの關連について、ある程度の音樂的認識を必要とするのではないだろうか。「詞」の研究に際しての音樂的認識の必要性が、その素養に乏しい評者には痛感されるのである。メロディーが失われた現在、これは

無い物ねだりだと言つてしまえばそれまでである。しかし、常に、「詞」がメロディーにのつたのだということを想起することは、非常に重要なことではないだろうか。本書を通讀して、評者はこの點について我意を得るといふわけにはいかなかった。本書の堅實な出來榮えは、まことに敬服に値するが、こうした無い物ねだりのな配慮も「詞」という文學様式には必要なことではないだろうか。

以上、評者自身の見解を示すに性急でありすぎたかもしれないが、本書の刊行された意義は、冒頭で述べたように非常に大きなものであり、これまで評者の述べた疑問や不満にかかわらず、いささかも減することのないものである。我國における「詞」の研究は、本書の刊行によって本格的に歩み始めたと言つてよいほどであり、本書によって觸發され、今後「詞」に關する研究の盛んになることを願うものである。

へなお、本書に對する近藤光男氏の書評が「創文」No. 154 (一九七六、九)にある。あわせて参照されたい。

(京都大學 中原健二)